



# わたしの聖戦

女性が働くことについて

129

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 福助人形に学ぶ

誰もが一度は目にしたことのある「福助人形」、商売の神様と呼ばれる日本オリジナルの人形である。

この福助人形にはモデルがあるといわれる。江戸は1700年代、摂津の佐太郎という男性がそれである。佐太郎は生まれるときから頭が大きく、背も小さい。当時で2尺といえ、1mにも満たない身長で、少々知能もゆつくりだったと伝えられる。

近所の笑いものになるのを憂いて、佐太郎は旅に出る。小田原で出会った香具師（かぐやし、又は、やし、ともいう）の世話になり、見世物とな

って日銭を稼ぐようになる。香具師とは、祭事るときに参道や門前で店を出したり、芸を披露する人々及びそのまとめ役のことである。いわば、露天商人のイメージに近い。佐太郎は、この見世物で本領発揮というか、大人気を博し、当時日本でも最も栄えていた両国にある見世物小屋でも活躍する。

数ある福助人形の風貌を見てもわかるように、いつもニコニコして愛想が良く、たいそう可愛らしい。従順で穏やかで、小さな身体で動く様も愛嬌いっぱい。きっと訪れた人々の気持ちを和ませてくれたことだろう。

ちなみに見世物小屋は江戸時代には庶民の最大の娯楽だった。今でいうところの手品やマジックの披露がほとんどであったが、動物の曲芸や少し外見が異なる子どもたちまで文字通りなんでも見世物にし、中にはグロで



の象が長崎に到着した話。象はよく知られている。メスの象はほどなく死んでしまったが、オスははるばる江戸までの長旅をこなし、道中見世物として人々の目にさらされる。この象の色がグレーだったため、てっきり白い象が来ると期待していた吉宗は、一目見てがっかり、すぐに見世物小屋に払い下げになったという。

エロティックなものもあったという。例えば象。象が最初に日本にやってきたのは1408年、その後またびたび当時の権力者に献上されてきた。1728年、当時の將軍吉宗の「象が見たい」の一言で、2頭

げくこの旗本の家を買われていく。一説には払い下げの値段は30両だったとか。なんと今のお金に換算すると約400万円である。佐太郎が旗本家に引き取られて以後、その御家にはいいことばかりが続

いたため、佐太郎のおかげととても重宝されるようになる。不具助と呼ばれていたのが、いつの間にか福助となり、ついには叶福助と命名された。

明治に入ってから、伊勢神宮を訪れた某靴下メーカーが福助人形に目をとめ、社のロゴマークとして商標登録し、今に至る。あっぱれ、佐太郎である。

江戸時代は異形の者を神様と崇める文化があった。障がいがあっても、歳を取っても、痴呆があっても、それを受け入れる優しさとしたたかさを併せ持っていた時代である。今のようになんか病気になることや老いることを恐れることなく、すべてを飲み込んでしまおうしよ。佐太郎の出世話は、今の日本に最も不足している、最も見習うべきエピソードだと思えてならない。

イラスト・伊藤栄章